

[シンポジウム]

4. ホスピスにおける遺族ケアとは

聖ヨハネ会桜町病院ホスピス

黒川 紀子

はじめに

ホスピスケアの対象は“患児とその家族”である。今回、ホスピスにおける「遺族ケア」についてテーマを与えられたが、患者さんやご家族への日々のケアの積み重ねが、患者さんが亡くなった後の遺族ケアに継続されるものであり、「遺族ケア」は「家族ケア」の一部であると考えます。

では家族ケアとは、と一概に述べられるものではないが、当ホスピスの基本理念と利用システムを紹介し、一事例を通して家族ケアとは何かについて考える。

1. 聖ヨハネホスピスの紹介

1) 基本理念

患者さんの価値観を尊重し、その人の生き方をチームで応援する。

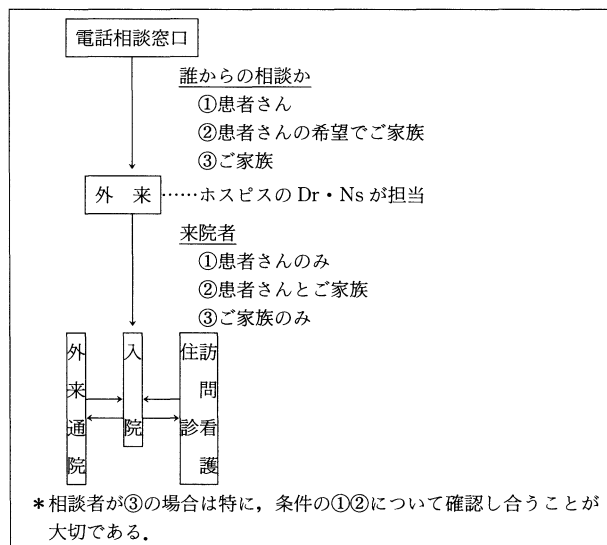
2) 対象者

疾患…厚生省の緩和ケア病棟基準の認可を受けているため、癌とエイズの末期の方（現在まで当ホスピスは癌の末期の方のみ）

条件…① 原則として、患者さん自身がホスピスケアを求めていること

② 告知の有無は問わないが、患者さんからの質問に対しては誠意を持って答えていく。患者さんやご家族に“嘘の上に信頼関係は成立しない”と言う基本姿勢を理解していただくこと。

3) システム



2. 事例

70代の男性。家族は妻と子供二人（一男一女、共に独立）

<病名>腎臓癌・肺転移

1) ホスピスまでの経過

2年前に腎臓癌と診断されたが、家族の希望と病院の方針で、患者さんには「腎結核」と説明し摘出術施行。その後、肺転移があり、痛みと呼吸困難、体力の低下のため「肺炎」と説明され再入院する。

2) ホスピスへの入院までの経過

長男より「父親が病状の悪化と共に、『入院しているのに段々悪くなる。自分の病気は本当はなんだ』と精神的にイライラし、医療不信になっている。辛い症状を取り、精神的なケアをしてほしい」と電話相談があり、外来予約となった。

外来へは、妻と子供二人が来院した。

主な相談内容

家族の希望と病院の方針で、今まで告知せずに来てしまったが、病状の悪化とともに主治医からの説明では納得せず、精神的にイライラし医療不信になっている。残された時間を辛い症状が無く、精神的に穏やかに過ごしてほしいのでホスピスへ転院させたいという、現状の打開策に焦点が当てられていた。

確認事項

“嘘の上に信頼関係は成立しない”と言うホスピスの基本姿勢を説明し、話し合う中で、自分自身の病状を知りたいと思っている患者さんの要望に、誰も答えてあげないことがイライラの大きな要因である。今までの経過から主治医が告知することは難しく、ご家族も伝えられない。ホスピスへ転院後、患者さんが質問したことに対しては“嘘”をつかずに答えていく、ということを確認し合った。

3) ホスピス入院中の経過

〔患者さんの思い〕

「肺炎」と説明されているが、治療しても悪くなる一方である。自分自身のことを何も知らないままで死んでいくのは納得がいかない。

〔ご家族の思い〕

ご家族とは外来で、質問されたことに対しては“嘘”をつかずに答える、ということを確認し合っていたが、転院後に症状が緩和されたこと、以前に比べて精神的に落ち着いてきたことで「現在の状態なら、いまさら告知しなくても…出来れば知らせたくない」という思いが出てきた。

ホスピス側からのアプローチ

1. 病状を説明する。
2. 「真実を知りたい」という終始変わらない患者さんの気持ちを伝える。
3. 不安に思うことを聴く。

① 告知後の精神的な落ち込みを支える自信がない。② 今まで嘘をついていたことが分かってしまうことが怖い。

4. 3に対するアドバイス

①に対しては、患者さんが希望したことであっても落ち込むことは自然なことである。落ち込んだ時に、家族が側に居て「けっして一人ではない」と支えることが大切であり、スタッフも一緒に支えていく。人は、支えがあれば必ず立ち直れる強さがある。

②に対しては、怒られる前に、今まで隠してきたことは、愛情からであることを伝えて詫げる。

落ち込みや怒りに対しては、側に居て落ち着くまで付き合うという覚悟が必要であり、その家族の思いは必ず患者さんに伝わるものである。

ご家族の中でも、妻、長男、長女とそれぞれの思いが微妙に異なり、以上のような内容を何回も家族と話し合い調整した。

その結果、ご家族の一致した了解を得られたので、ご家族も同席し患者さんに病名と病状を伝えた。伝えた後の患者さんは「これでやっと納得できた」と穏やかに話された。

翌朝、夜間付き添っていた長男が「父と、一晩中色々なことを話しました。こんなに自分自身のことを知りたがっているとは思ってもいなかった。また、怒られることを覚悟していたのに『隠して辛かったら』と逆に労ってくれた」と明るい表情で話してくれました。

その後、患者さんはご家族に感謝の気持ちを伝え、告知後一週間目にご家族の見守る中、穏やかな表情で旅立たれて行かれました。

4) その後のご家族の様子

亡くなって一週間後に、ご家族がホスピスを訪れて「父だけでなく、家族の精神的なケアをしていただきました」と次のようなことを話してくれました。

告知というもっとストレートに言うのかと思っただが、知りたがっているギリギリのことを、過去を否定せずに言葉を選びながら、本人が納得出来るように説明してくれた。すべてが経験したことがなく怖かったが、家族にも納得できるまで説明して、労ってくれた。

また、ホスピスに来て、知りたいと思うことを知

ることの大切さを知り、父の希望をかなえられて後悔しなくてすんだ。今までと死に対する考え方が変わった。

最も大きなことは、父の死を通して家族の気持ちが一つになれたことである。

その後も何回か訪れてくれましたが、ホスピスの考え方を一人でも多くの人に知ってもらいたいで、機会がある度に話しているということでした。

おわりに

末期癌と診断された患者の家族は、患者が痛み(身

体的・精神的・社会的・霊的)を感じると同様に、様々な痛みを抱えながら、介護し見守っていると言うことを忘れてはならない。

患者さんの生き方を応援するということを基本理念とし、“患者と家族”をケアの対象となるホスピスにおいては、このようなケースの場合、何度でもご家族と話し合う場を持ち、調整していくことが不可欠となってくる。調整せずに、どちらか一方のみの思いのみを応援することは、残されたご家族に後悔させてしまうことになりホスピスケアとは言えない。